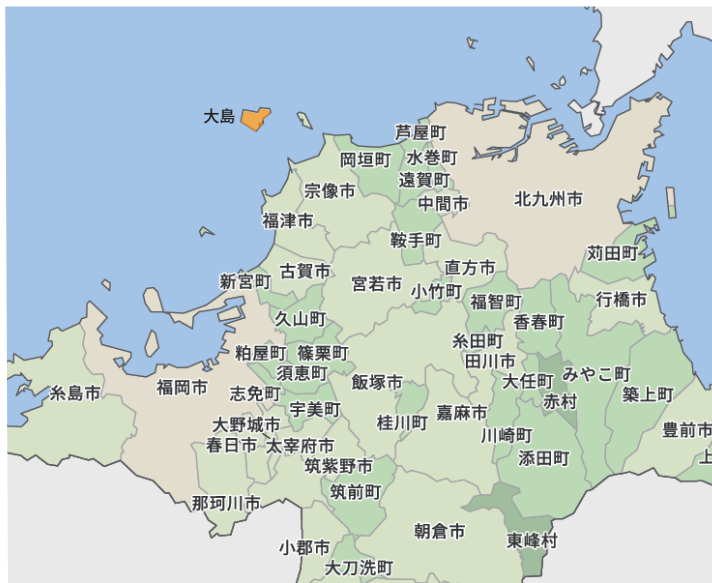


### 3. 合同会社渡海屋 と かい や (福岡県宗像市大島) む な か た し お お し ま

地域外の若者たちが、神守る島の活性化をめざし起業。  
ゲストハウスの開発を手始めに、多彩な企画開発へ。



#### [宗像市大島のプロフィール]

▶福岡県宗像市は、福岡市と北九州市の間に位置する人口10万人弱の市で、福岡都市圏のベッドタウンとして発展を続けています。「宗像大社」や「鎮国寺」などがあり、特に宗像大社は沖ノ島を神域とし、沖ノ島で出土した古代祭祀の奉獻品の多くは国宝に指定され、「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」は平成29年(2017年)に世界文化遺産に登録されています。

▶大島は宗像市の神湊(こうのみなと)渡船ターミナルから船で約25分。大島からさらに50kmほど先にある沖ノ島は神域として一般の上陸は禁止。最も近くで沖ノ島の宗像大社を遥拝できるのは大島で、沖ノ島の「神宿る島」に対し「神守る島」と呼ばれています。

▶大島にはこれら歴史的な物語や神社、美しい景観やマリンレジャーなどの観光資源もあり、海釣り目当ての来訪者も多く、また近年では九州オルレのコースにもなっています。一方、島の過疎化は進行しています。昭和30年代のピーク時には12,000人の人口がありましたが、平成22年(2010年)には731人、令和3年(2021年)12月では569人と減少が続いています。



## (1) 神湊から船で大島へ

今回、合同会社渡海屋を対象地として選定したのは、使われなくなっていた別荘をリノベーションしてゲストハウスに再生し、島の活性化につなげようとしている若者たち(合同会社渡海屋)が実験的にワーケーションの場として企業の方々を受け入れ、大島の課題である漂着ゴミの清掃等をプログラムとして提供したという記事を目にしたことがきっかけです。

地域資源(歴史や海)と空き家の再生、地域への波及効果といった連動性は農泊に限らず地域活性化策につながるものです。また、圧倒的に美しい景観を目の当たりにする高級ゲストハウス(1棟貸しで1泊8~10万円)という話題性のある商品を核として周辺のサービス(低価格のゲストハウスや新たな観光商品など)を配置していこうという考え方は、地域間競争の中での情報発信や収益性の拡大という面で熊本の農泊地域にとっても有効ではないかと思われます。

令和3年(2021年)11月28日(日)、午前6時すぎに熊本市を出発し、高速を使って2時間ほどで神湊のターミナルへ到着しました。すでに第1・2駐車場は満車状態でしたから、休日の観光客はけっこう多いのだらうなと思いました。天気もいいので釣り客が多いのかもしれませんが。しかし、乗船してみると、釣り竿や保冷ボックスを持った見るからに釣り客という人はほとんど見当たらず、意外でした。

ゲストハウスを運営する合同会社渡海屋のメンバーのひとり、谷口竜平さんとはこのフェリーの中で落ち合いました。

実は、私が合同会社渡海屋に強い関心を持ったのは、こちらからの取材依頼に対する谷口さんの対応の良さがあったからです。私からのメールに対してすぐに返事があり、取材協力への快諾、対応内容と予算の提案、アテンドや食事、レンタカーなどの手配と、数少ないメールで効率的に打ち合わせが進み、とても気持ちがよかったです。そして、「大島には何時のフェリーで渡られますか?」と問い合わせが来て、同じ便で集合となったわけです。

この間のスムーズな対応は都会のサービス業に慣れた方たちにはストレスなく感じられるはずで、今後の農泊にも必要な要素になると思いました。



宗像市神湊フェリーターミナルから大島へ



渡海屋・谷口さんの案内で中津宮へ



中津宮から湊を見下ろす

## (2) 晴天の下、大島を巡る

午前9時25分発のフェリー「おおしま」は約25分で予定通り、大島湊ターミナルに到着。電動自転車のレンタル窓口もあり、グループの観光客たちが列に並んでいます。

宗像大社の三宮[沖ノ島の沖津宮(おきつぐう)、大島の中津宮(なかつぐう)、本土の辺津宮(へつぐう)]のひとつ中津宮はターミナルのすぐ近くです。谷口さんの案内で見学しました。

中津宮の下で、渡海屋の代表である田中誠一さんと合流。宗像大社の三社奉賛会会長の沖西敏明さんも一緒です。お二人は、たまたま遭遇し、取材が来ているので一緒に話しましょうと田中さんが誘ってくれたそうです。

沖西さんは地元の方で宗像大社の重要な役目を務めておられ、島の歴史など興味深い話を聞かせていただきました。また、渡海屋代表の田中さんがいかに地元のキーマンと親しい関係を築いているのかも伺えました。

その後、宗像大社沖津宮遙礼拝所へ。ターミナルや中津宮とは反対側、北側の海岸にあります。断崖の上にある沖津宮遙礼拝所からは玄界灘が一望。年に何度もない好天に恵まれ、約50km離れた神宿る島・沖ノ島をはっきりと見ることができました。

ぽつりぽつりと観光客に出会います。九州オルレのコースを歩きに来た人も多いようです。徒歩の人もいれば、電動自転車で走る人も見かけます。島ですから、大型バスが来るということはありませんが、域外の人を見かけるのは日常のようです。

昼食後、すぐ近くの「かんす海水浴場」へ。ここには「夢の小夜島」という鳥居のある小島があります。この場所を使って、「禊(みそぎ)サウナ」という企画を渡海屋が考えており、そのデモンストレーションを風景を取材しました。なお、翌日には福岡市役所からの推薦によりイギリスBBCテレビが取材に来るということです。

禊サウナは、移動式の簡易なテントサウナの利用サービスですが、元旦などに海に浸かって夢の小夜島の鳥居をくぐるという大島伝統の「禊」と組み合わせるとのことです。これらについては後ほどインタビューの中でご説明します。



宗像大社沖津宮遙礼拝所



右から谷口さん、沖西さん、田中さん



かんす海水浴場と夢の小夜島

### (3) 合同会社渡海屋、田中さん・谷口さんインタビュー

襖サウナの取材を終え、今日の宿泊地である「TOKAIYAゲストハウス」へチェックインしました。ここは空き家になっていた民家をリフォームして、リーズナブルなゲストハウスとして渡海屋が運用しています。

外の壁や玄関脇にはロゴマークがプリントされたプレートが設置されています。このロゴマーク「TOKAIYA」は、一日一組限定の高級ゲストハウス「MINAWA」や三番目のゲストハウス「エンデメンデ」とともにデザイナーである谷口さんの作品です。

ここで、田中さんと谷口さんにインタビューさせていただきました。

#### 1) 合同会社渡海屋は「島で仕事を作っていく会社」です

田中さんや谷口さんの名刺には「宗像大島の島づくり会社 合同会社渡海屋」と表記されています。渡海屋は、ゲストハウスの開発・運営をやっているだけではなく、アテンドサービスやレンタカーサービスなど観光関連のメニューも備え、また、襖サウナといった新しい観光企画の開発も行っている会社です。

ゲストハウスの運営を中心に観光サービス事業を展開しますが、その先には「疲弊していく島を活性化させたい」という思いがあります。「『島で仕事を作る』ことが僕たちの一番の目標かもしれませんね」と田中さんは語ります。「農泊」とは異なりますが、「地域づくり」の視点は共通しており、新しい時代に合わせたチャレンジする姿勢と手法には学ぶところが多いと思います。

渡海屋の構成メンバーは4名です。代表の田中さんは大阪出身で宗像市(本土)と大島の2ヶ所で整骨院を経営しており、大島に住んで9年目。谷口さんは宗像市(本土)に実家があり、同市でデザイン事務所を運営しています。3人目は糺屋(こうじや)総一郎さんで投資コンサルタント。4人目の山下直人さんはリクルートの社員で以前は旅行情報誌「じゃらん」に所属していました。興味深いのは地元・大島の出身者が一人もいないこと。そして、領域が異なる専門家が集まっており、各自の専門知識や経験が渡海屋の発足や運営に役立っているということです。このような特徴もまた熊本の農泊や地域づくりに大きな示唆を与えてくれるのではないかと思います。



TOKAIYAゲストハウス



渡海屋代表の田中さん(左)と谷口さん(右)

#### 2) 地域外の4人が合同会社渡海屋をつくったわけ

合同会社渡海屋が設立されたのは令和2年(2020年)2月、新型コロナウイルス感染症が爆発的に広がる直前でした。「立ち上げて『よし、頑張るぞ』という1、2カ月後にコロナがやってきたという感じでした」(谷口さん)。

まず田中さんから渡海屋を設立するに至る経緯をお聞きしました。

「本土の方で治療院をやっていたのですが、大島の整骨院が空くので1年間だけやってみないかと声をかけていただきました。島の人たちと触れ合っているうちに、人口も少ないですから、区長も務めることになったりして、過疎の問題など島の実情を知ることになったわけです。

そんな時に毎年開催している花火大会も継続が難しいという話を聞いて、『募金などでみんなで頑張れば継続できるのでは?』と提案したら『じゃあ、お前やれよ。実行委員長になれ』ということに。そこで手伝ってくれたのが宗像でデザイナーをやっていた谷口くん。知人の紹介でした。谷口くんといろんな話をしていく中で『大島の活性化を手伝いたい』というテーマが明確になってきました」。

谷口さんが話を引き継ぎます。

「『大島を盛り上げよう』という話になりました。それで『使える物件を探そう』となり、北西岸の大島灯台の近くにある空き別荘を見に行きました。『ここで宿ができれば面白いよね』と、私の知人に投資コンサルタントがいるので相談したら興味を持ってくれて。それが3人目のメンバーの靴屋さんです。『リニューアルできるかな』『やりましょう』『地域のママさんたちにベッドメイキングなどを頼めば地域にお金が入る仕組みにもつながる』というふうに進行していったわけです」。

「ママさんというのは主に地域外から嫁いで来ている奥さんたち。整骨院の受付などで手伝ってもらっている方たちもいて、そのつながりです」と田中さん。

「大島では奥さんたちが気軽にできるパートとかないんです。整骨院での手伝いでも『仕事を作ってくれた』と感謝してもらえる。そのことが、『大島に仕事を作る』という目的を考えるきっかけになりました」。

平成30年(2018年)の秋、空き別荘は「一日一組限定離島宿MINAWA」としてオープン。そして令和元年(2019年)、3人のメンバーが集ったところで、会社を設立することに決めました。

「会社組織にしたのは『僕らは大島でこういうことをやります』という覚悟を示すことでもありました。3人がバラバラに行動していても、島の人からは『お前ら何をやってるんだ』となる。ちゃんと認めてもらう必要がある。また、行政や企業とおつきあひするにも法人格がないと動きづらい。その後、宗像市から創業補助金をいただいたり、福岡県の事業を一部受託したり、法人格を得たメリットは大きいです」(谷口さん)。

会社設立まもなく、4人目のメンバー山下さんが加わります。山下さんはリクルートの社員で当時は旅行情報誌「じゃらん」に所属しており、広報関係に詳しい人材でした。運営するゲストハウスの情報発信、さらに大島の観光活性化におけるPRについて必要な知識を持ったメンバーでした。



存続が危ぶまれた花火大会のにぎわい



渡海屋の4人のメンバー  
(左から)靴屋さん、谷口さん、田中さん、山下さん

### 3) 3つのゲストハウス、その役割のちがい

渡海屋の事業の中心は、ゲストハウスの運営です。ここではどのように企画し、運営しているのか見ていきます。現在、オープンしているゲストハウスは3軒です。

1軒目は、「一日一組限定離島宿MINAWA」。大島の北西岸にある大島灯台のすぐ近くにあり、元は企業の保養施設だったようです。灯台や沖ノ島を望む高台にあり、景観は抜群。白を基調にした清潔感のある建物で、大人なら6名まで宿泊できます。素泊まりの料金は1棟貸し約10万円で、料理のケータリングやマッサージなどの付帯サービスも提供しています。福岡市や東京の女性グループや企業のワーケーションとしての利用が多いそうです。

谷口さん「ハイクラスの雰囲気仕立てたのは、糺屋さんとの打ち合わせからです。彼は鎌倉や京都で古い物件をリノベーションして宿を開発しており、単価の高い仕事を生み出し、地元にお金がちゃんと落ちる、関わる人に恩恵がある仕組みを作らないと、特に大島のような場所では継続していけないのではないかと。そこでまずは『高い宿をつくる』というところからスタートしたわけです。

また、大島には以前から釣り客向けの安い宿もあります。それらとは競合せず、相乗効果を生み出していくべきだとも思いました。実際、お客さんの取り合いにもならず、スタートとしてはよかったと思います。『単価』というのは大事なポイントの一つだと思います」。

2軒目は、「TOKAIYAゲストハウス」。こちらは「MINAWA」の高級感とは異なる、漁村の民家をリニューアルしたリーズナブルなゲストハウスです。「MINAWA」オープンのすぐ後にオープンされました。

「TOKAIYAゲストハウス」は木造2階建て。1階部分は玄関、居間が3部屋にキッチンなどの共有スペース。裏には簡単なバーベキューができるくらいの庭があり、縁側や洗濯機などがあります。2階には宿泊できる部屋が4つあり、2室は1名用のベッドルーム、2室は数名が泊まれる和室になっています。

建物は築60年ですがバスルームは新しくきれいで、Wi-Fi環境も整っています。また、以前使われていた方が高齢者だったようで、屋内各所に手すりが設置されてお



MINAWA



MINAWAのベッドルーム(上)と浴室(下)



MINAWAのベランダから見下ろす風景

り、段差や急な階段がある古い日本家屋においては誰にとっても安全な工夫になっています。宿泊料金は1名3,000円代から設定されており、リーズナブルです。そのため海外からのお客さんも多いということです。

谷口さん「MINAWAは福岡の方の利用が多いですが、TOKAIYAの方は海外のお客さんが来ますね。ヨーロッパの方は安いゲストハウスに転々としていく文化があるので。MINAWAは国内の方がちょっと豪遊する感じです」。

3軒目のゲストハウスは、「エンデメンデ」。大島の方言で『どうにかこうにか』という意味。ここは「MINAWA」と同じ1棟貸しのゲストハウスで、料金は1棟1泊(8名まで宿泊可)で3万円からの設定になっています。

本来、「TOKAIYA」は渡海屋メンバーの基地のように使う予定だったそうですが、お客さんが増えて、新たなゲストハウスが必要になり、「エンデメンデ」をオープンしたとのこと。宿泊業免許も取得し、令和3年(2021年)11月にはネット予約も受け付けられるようになっています。

3軒のゲストハウスの条件などを見比べると、それぞれにターゲットが異なり、料金設定などに多様性を持たせてあることがわかります。逆に言えば、その建物が立地している条件を元に、成立可能なターゲットや料金を設定し、そのニーズに沿うようなリフォームが行われているということでしょう。

それも1軒ずつオープンして、その動向やニーズの有り様を見ながら次のプランを考えていくというのはとても良いやり方のように思えます。

大島のような離島では一時に訪問される観光客の人数も限られているでしょう。であれば、同じターゲット同じ価格帯のゲストハウスを増やしてもお客さんを取り合うだけになってしまいます。領域をずらしていくことで多様なニーズに応えられる大島観光を作っていこうという戦略がよくわかります。

#### 4) ターゲットと情報発信、そして新型コロナの影響

渡海屋の3つのゲストハウス運営のやり方で、興味深いと思った点のひとつに「情報発信」の方法があります。このことはターゲット(客層)と密接な関係があります。

ハイクラスな1棟貸しゲストハウス「MINAWA」はネットで調べると「じゃらんネット」や「楽天トラベル」、「るるぶトラベル」などからも予約することができます。同じく1棟貸しですが価格はリーズナブルな「エ



TOKAIYA 入口



TOKAIYA 1階  
玄関前の居間(上)、リビング(中)、台所(下)

ンデメンデ」の場合は、「じゃらんネット」と「JTB」。

一方、古民家ゲストハウスでよりリーズナブルな「TOKAIYA」では一般的な予約サイトは使用せず、海外向けの民泊情報サイト「Airbnb(エアビーアンドビー:以下、『エアビー』)」だけで情報発信を行っています。

**田中さん**「TOKAIYAは市の広報にも載せず、エアビーだけに載せました。エアビーだけでどんな人が来るのか知りたくて、実験してみたんですね。大島の人で使いたいという人が出てきた時、参考になれるかと思ったから。するとハーバード大学のアメリカ人の女性研究者が一人でやって来て、1カ月滞在していきました。研究室がコロナで閉鎖されるのでエアビーで脱出先を探したと。もともと日本が好きで片言の日本語がしゃべれる人でした。また、イギリス人の夫婦が本国からエアビーで予約してくれました。エアビーは翻訳もしてくれて便利です」。

**谷口さん**「エアビーの海外への効果はありますね。TOKAIYAがいっぱいになって、エンデメンデにお客さんを回したこともありましたから。僕の実家(宗像市)ではシェアハウスもやっていて民泊もやれるようにしたんですが、やはりエアビーで海外からの問い合わせが多かったですね。『日本の田舎を体験したい』『九州に遊びに来た途中で一泊したい』という内容でしたね」。



TOKAIYA 1階 浴室



TOKAIYA 2階 居室

しかし、このような反応やターゲット像の想定をそのまま信じていいのかわからないと谷口さんは言います。

「渡海屋の事業そのものがほぼ新型コロナが拡大してからの稼働ですから、実際には平常時の状況がどうなるのかまだ体験していないんですよ。国内からのお客さん、海外からのお客さんがコロナ明けにどのような動きになるのか。まだわかりません」。

## 5)「すきにもうが」な渡海屋、今後の計画は？

地域外の若者たちが会社を作って新しいことをやっている。それは島の人たちからはどう見えているのでしょうか。

**田中さん**「あるおばあちゃんが、僕のことを『すきにもうが』と言ってるので、どういう意味ですかと聞いたんですよ」。

**谷口さん**「『鋤』で『藻』はすくえないですよ。そういう馬鹿なことする人、人がやらないようなことを喜んでやるような変な人。損得抜きで好きなことをやる人みたいな。そういうのを『すきにもうが』と呼ぶそうです。褒め言葉じゃないですね」。

**田中さん**「アホなことやっとなと。でもそのスタンスは大事やなあと思っています」。



では、渡海屋はなぜ「すきにもうが」なことをするのでしょうか。

**田中さん**「やっぱり『島の人に惚れた』というのがあるんですよ。来訪された人たちに島の人とふれあってもらえば、僕が感じている面白さをわかってもらえるんじゃないか。そういう場を作りたいなと思うんです」。

今後の計画についても聞かせていただきました。

まず先ほど見せてもらった「禊(みそぎ)サウナ」のアイデアの実現化について、伺ってみました。

**谷口さん**「渡海屋メンバーの山下くんがアウトドア好きで『離島サウナをやってみたい』と。ではテントサウナを島の絶景ポイントでやってみたら？サウナの後に冷水に入るのをかつてあった『沖ノ島の禊』を疑似体験することに変換してみたら？そんなふうに展開していったんです。テントサウナのブームに大島の歴史資源を組み合わせるという企画ですね」。

**田中さん**「実際に大島の海岸にテントサウナをいくつも並べて体験してもらおうイベントも実施しました。とても好評で、本土の方から若い人たちがやって来て、水着姿になるわけです。島の人たちがびっくりして、『田中、でかした!』と(笑)」。

次に、「健康」をテーマにしたファスティングなどの企画も検討中とのことでした。

**谷口さん**「ダイエットやファスティングは食欲との戦いですが、離島には逃げ場もなければ、コンビニも娯楽もない。その代わりに、自然を楽しんでくださいと。すると、散策とか神事とか大島の資源をそのまま活かせる。あるものを活かすコンテンツとしてダイエットやファスティングは大島に合っていると思っています」。

また、リピーターづくりにも機能すると考えておられます。

**谷口さん**「ダイエット、ファスティング合宿は短い人でも2泊3日、長ければ1週間と滞在期間が伸びるし、その期間中に地元の人とのふれあいも増えるので、『また行ってみよう』というニーズも生まれやすい」。



夢の小夜島と禊サウナ

レンタサイクルで島を巡る観光客



谷口さん「でも、リピーターが生まれるいちばんの要因は田中さん。お客さんが来た時、最善を尽くす。『田中さんがいたから、大島は楽しかった』とおっしゃる方が多いんです。田中さんがいなくてもいかに『楽しい大島』にしていけるのが、これからのポイントですね」。

田中さん「僕が大島ファンなんです。島の人たちのファンなんです。島に来られた方たちにもいろんな人たちに会って、ファンになってほしい。そういう気持ちでやっているんですよ」。

ほかに「島の生活を体験する」といった農泊における農業体験のような企画はないのでしょうか。

田中さん「そういう体験メニューも考えたいですね。今も『神社まわりの清掃』には多くの人に参加しています。大島にとって神社や遙拝所は重要な施設で、清掃活動も島の暮らしを知るひとつの体験ですね」。

## 6) ワークーションの可能性と大島観光の目的

今回、大島を選定したひとつの理由は、「ワークーション」の場として農林水産省のホームページなどで紹介されていたからですが、実際に企業の研修の場としての活用実績はほとんどないということです。

島には光通信が開通しており、特に港やTOKAIYAがある南側はWi-Fi環境も整っている場所が多いようです。TOKAIYAサイトのコメント欄には、「Wi-Fi環境もよく、円滑に仕事できました」という書き込みもありますし、海外からの来訪者による好評のコメントも複数見られます。理由として挙げられたのは「ホストの対応がよい」「Wi-Fi環境が整っている」「建物は古いがバスルームは新しく、不便や不快な箇所がない」などです。

では、これだけの環境が整っているのに「ワークーション」の活用が増加しないのはなぜか。まず第一に新型コロナのせいで地域間移動がはばかれる状況にあること。第二に企業内でそのように一定期間会社を離れ、かつ、社内の同意を得るのは現状ではかなりハードルが高いということです。たまには会社を離れ、週末、離島でプランニングをしようという話になっても、家庭の行事や個人の嗜好性もあって、まとめるのは難しそうです。

そのように考えた時、前述の「ダイエットやファスティングを目的とした大島観光」といった切り口は重要な意味を持つかもしれませんが、「仕事」という切り口では観光プランとしてまとまりにくい、「独自の目的」なら志願者としてまとまるかもしれません。このように地域外の人々の多彩な視点やアイデアと大島の資源とが結びつき、試行錯誤しながら発展していくところが、合同会社渡海屋の取り組みの面白さではないかと思います。

MINAWA 1階  
明るく広いリビングは仕事用にも使いやすそう



#### (4) TOKAIYA ゲストハウスに宿泊

インタビューを終え、田中さんと一緒に近くの「姫っこカフェ」で夕食をいただきました。女性グループでも気軽に美味しい食事ができるカフェで、大島の特産品なども販売されていました。

翌朝8時、近所のお母さんが朝食の準備をしに来てくれました。お母さんも田中さんの施術を受けているようで、「しばらく前は歩くこともできんようになってね。田中先生のおかげでこうやって歩けるようになったと。だけん、田中先生から頼まれると断れん」と笑いながら話してくれました。

古い建物は落ち着きますし、バス・トイレがきれいで快適なものポイントは高いです。標準的なアメニティは揃っていますし、大型テレビやアイロンなどの備品も用意されていました。リビングのテーブルには宿泊の手引や大島のガイドブックなどが置かれています。事前に情報は得ていましたが、快適な宿泊で、とても心地よい朝を迎えることができました。



夜明けの大島湊



朝食の準備のお手伝いしてくれたお母さん

#### (5) 帰還までの取材

2日目は、渡海屋でレンタカーを用意してもらい、島内をまわりました。

まずは「MINAWA」です。大島灯台と沖ノ島が浮かぶ玄界灘を見下ろす美しい風景です。天候は晴天、水平線もくっきりと見え、沖ノ島も見ることができました。ベッドルームからもバスルームからもオーシャンビュー。これは満足度が高い。多少高めのプライスでも満足される方は多いでしょう。なお、「MINAWA」の運営管理は渡海屋メンバーの一人である糀谷さんの会社・株式会社ローカルツーリズムが行い、地域の女性たちによるベッドメイキングなどの業務もそこからの委託になっています。

次に「MINAWA」から東に進んですぐの風車展望所・砲台跡へ。昭和11年(1936年)に完成した砲台の跡で、4門の大砲と観測所のコンクリート基礎部分が残されています。まわりを海に囲まれたような風景を味わえます。

観光に訪れていた女性たちに出会いました。宗像市(本土)に在住しており、子どもの頃から何度も訪れているそうです。宗像市の人たちにとって大島は気軽に自然や景観を楽しむことができる、例えば熊本市の人たちが菊池

風車と砲台跡(上)と観測所からの眺め(下)



溪谷や阿蘇のような場所に行くことと同じなのかもしれません。

大島灯台あたりや砲台跡あたりの道路では、小グループの来訪者とすれ違ったり、道を聞かれたりしました。多くは九州オルレのコースを巡っておられるようでした。

その後、私たちは再び「TOKAIYA」に戻って帰る準備をしつつ、田中さん・谷口さんと合流して昼食を食べ、「TOKAIYA」の清掃に来た島の奥さんの話を聞いてからフェリーターミナルへ。

島に住む方たちの話では、渡海屋の活動についてはとても好意的です。特に域外から嫁いできた若いご夫人たちにとっては島での新しいアクションは楽しい出来事だし、協力意向も高いようです。一方、課題については「医療機関の不足」が挙げられました。過疎化する離島には子どもの姿はよく見かけます。しかし、すべての出産は本土で行われるそうです。大島には出産が可能な産婦人科医院が1軒もないのです。

フェリーターミナルには島から帰っていく人、仕事で本土と行き来する人があふれています。月曜日ですから、観光客も若年層は見かけず、オルレなどのシニア層が多いようでした。帰っていく観光客と一緒に、私たちは午後のフェリーで、大島を後にしました。



フェリーで大島から本土へ

